

唯識の思想と実践

—— 〈単純構造〉と入無相方便をめぐる——

北野新太郎

筆者は、初期唯識思想の中の唯識三性説について論じるときに、〈単純構造〉や〈二重構造〉という言葉を使用する場合がある。上記の二つの言葉は、筆者による造語ではなく、前者は、菅原泰典、後者は、長尾雅人による使用例があり、筆者のみるところでは、それら二つの言葉は、単に、上田・長尾論争のみならず、その背後にあるとみられる安慧・護法の思想的対立の問題に関係する、初期唯識思想の形成史を理解するための重要なキーワードであると考えられる。

上田義文博士が、『成唯識論』における護法説」批判の結果として、*Triṃśikākārikā* (=TK=『唯識三十頌』)における唯識三性説の特徴を抽出した結果として示される「能縁が有（依他起性）であり、所縁が無（遍計所執性）である認識」という言葉は、「単純構造」的な認識モデルを表現しているとみることも可能であろう。その場合、ヴァスバンドゥは当然、「二重構造」をも熟知した上で、あえて「単純構造」的な認識モデルをTKにおいて示しているのであるが、それは何故なのか、ということは、一つの問題点である。このことには、原田和宗氏がいわれるようなヴァスバンドゥにおける「韜晦者」的性格も、深く関与しているのではないだろうか。

実は、あまり知られていないことであるが、円成実性には（認識主観における意識状態の違いとの関係で）二つの意味がある。このことは、「唯識無境」に二つの意味があることと呼応しており、具体的にいえば、TK第 25 偈において示される真如（*tathatā*）としての円成実性に対応するものが、常に存在する“*vijñapti-mātratā*”すなわち、「唯識実性」であり、これは、われわれの心の迷・悟にかかわらず、常に、存在するものである。そして、TK第 26 偈、TK第 27 偈において示される段階の唯識は、いわば、〈机上の唯識論〉とでもいふべきものに他ならない。それに対して、依他起性に相当する宗教的主体としての*vijñāna*の上に、真如であるところの円成実性が入無相方便の実修を通して体得された状態がTK第 28 偈において示される“*vijñāna-mātratva*”である。しかしながら、やや意外なことであるが、この“*vijñāna-mātratva*”という言葉が使用されることの思想的必然性について指摘した研究者は、これまでのところ、筆者以外には、存在しないようである。本稿の目的は、「唯識無境」に二つの意味があるということに焦点づけをしながら、「唯識無境」の実践としての入無相方便と唯識思想において示される認識モデルの変化との関係について考察することに他ならない。

〈キーワード〉単純構造，二重構造，机上の唯識論